

ご入学おめでとうございます。清泉大学での学びを始めるにあたって、本学のモットーの一つ「Sursum Corda」という言葉についてお話しします。

皆さんは「フィルターバブル」という言葉を聞いたことがあるでしょう。

この言葉は、インターネットの活動家イーライ・パリサーが、彼の著書『フィルターバブル：インターネットが隠していること』で使用し、知られるようになってきた言葉です。ネットを創った人々は、情報が様々な制約から解放され、異なる意見を持つ人間同士が 広く意見を交換し合える時代をもたらすことを目指しました。そして、その目標は着実に実現化され、現代、ネットは日々の生活において、欠くことのできない便利なシステムとなっています。しかし、このネットの普及は、同時に、大きな危険性もはらんでいます。

インターネットを使用するとき、そこには、アルゴリズムという機能が働きます。この機能は、利用者個人の検索履歴を分析・学習し、情報の海から、個々のユーザーが、見たいと感じる情報を、優先的に表示してくれるという、大変便利な機能です。しかし、この便利さの裏で、ネット利用者は、アルゴリズムのもたらすフィルターによって、「重要で、知るべき」であるにもかかわらず、自分が聞きたくない、見たくない情報から、切り離される危険にさらされることにもなります。そして、自分の持つ好み、価値観に合致した情報だけが、真実も嘘もごちゃ混ぜになって、あふれるように供給され、自分の考えに賛同してくれる「いいね」という声だけがこだまする「バブル」の中に閉じ込められる現象が起こるのです。

いったん、バブルの中に閉じ込められてしまうと、バブルの内側からは、その外にどのような世界が広がっているのか が見えにくくなります。そして、自分が閉じ込められているバブルがどれほど狭いものか、その中で考え方の「ゆがみ」についても 知ることは難しくなります。このような「閉じ込め症候群」は インターネットの世界だけの問題ではありません。人間世界のあらゆる領域に起きてきた現象であり、「フィルターバブル」によって、その問題がはっきりと見えてきた と言えるのかもしれない。

では、なぜ、このような、心を「閉じ込める」動きが広がるのでしょうか？ それは、私達の心には、潜在的に、「閉じこもりたい傾向」があるからではないのでしょうか。できれば、自分と異なる意見は聞きたくない。自分と同じ考え方、同じ興味を持つ人たちだけの世界に閉じこもり、その世界の外にいる人々に関しては、眼をそむけていたい という傾向です。

一方、ここで問いたいのは、「心」は閉じこもったままで、じっとしていることができるのだろうか ということです。閉じこもりたい心の傾きとは逆に、私達の心には、より多くのことを知りたい という欲求もあります。一つでも多くのこと、嘘ではなく本当のことを知りたい、という根源的な欲求です。

後ほど、ひとつの聖書の箇所が読まれます。

その箇所は「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。」と続きます。この言葉の大切なポイントの一つは、欲しいものが与えられるためには、まず、「求める」ことが重要であるという点です。一つでも多くのこと、本当のことを「知りたいと求めるころ」は、私達に備わった基本中の基本の欲求です。

「知ることを求めて」私達は問いを発します。問いは、「答えを求める」ために「考える」ことを促します。「考える」ことで、すぐに答えを見つけることができる問いもあります。しかし、実際には、考えても、考えても、答えに到達することが困難な問いの方が多いのです。そうなる、考えるプロセスでは、往々にして、暗いトンネルの中を 出口に向かって歩き続けるような忍耐を必要とします。しかし、そうして考え続けた先に「わかった！」というひらめきが起こった時、深い喜びが私達の心にもたらされるのです。そして、求め続けることによ

って光に出会う という、うれしい経験の積み重ねは、「考える続ける力」を養い、ひとり一人の人生だけでなく、人間文化全体を発展させる原動力ともなってきたのです。

しかし、「閉じこもりたい傾向」は、「知りたい欲求」を抑圧（よくあつ）するだけではなく、「考えることなど意味がない」という思いを 起こさせます。その結果として、自分の頭で考えることを苦痛と感じ、簡単に見つけられる答えをネット等から手に入れ、それ以上、自分では考えることをしない、ということが起こります。

清泉大学、上野キャンパス、図書館棟の壁面、左上に、空を見上げるように「Sursum Corda」という言葉がかかげられています。この言葉はラテン語です。「Sursum」とは、「高く」あるいは「上に向かって」、「Corda」は「心を」という意味です。日本語にすると「心を高く上げよ」となります。英語では「Lift up Your Hearts」。この言葉は、カトリック教会の典礼である「ミサ」が「ラテン語で」行われる際、司祭がとる言葉のひとつです。

それでは、何のために、何に向かって、心を高く上げるのでしょうか？

それは、心が閉じ込められることによって生ずる 問うことへの抑圧（よくあつ）と、その抑圧が生じさせる不安と恐れと孤独の泥沼から、私達人間の心を解放する「方向性」が そこに示されているからです。

自分、あるいは、自分たちだけの世界に閉じこもって、下を向いて、自分に見える足元だけを見て、一方的に与えられる情報だけを 黙って受け取って歩きがちな私達が、心を高くあげるとき、心は閉じこもる闇から解放され、自らの知性の力の持つ「問う力」、「考え続ける力」が回復し、次のことを、少しずつ理解していくようになります。

それは、心を高く上げる先には、未知の世界が広がっていること。その世界は悠久の歴史の流れの中にあり、「いつくしみのまなざし」がその世界と歴史を包み、導いていることを。そして、その「まなざし」に見守られて、私達のひとり一人は、自分の小さな世界から飛び出し、世界に広がる多くの人々とつながり、手を携えて、より豊かな世界を生み出す希望と、それを実現する喜びを味わう人生に導かれている、ということです。

Sursum Corda は、讃美歌として広く歌われています。日本語のタイトルは「心を高く上げよ」です。その2番の歌詞は「霧のようなうれいも、闇のような恐れも、みな後ろに投げ捨て、心を高く上げよ」と続きます。

清泉大学において、これから皆さんが取り組む様々な学習や体験は、すべて、「Sursum Corda の方向性」によって貫かれています。これからの学びの日々、キャンパスの壁に、この言葉を見上げる時、次のことを思い出してください。閉ざされがちな壁を越えて、より多くの人々に触れあい、様々な困難にあっても、考えることを諦めないこと。そして、より幸いな世界を創るために、他者と手を携えて歩み続けることの意味と、そのような歩みをもたらす喜びに満ちた人生に、皆さんの一人一人が 招かれているということ。

ご入学おめでとう。「Sursum Corda」 「心を高く上げよ」

2025年4月 清泉大学 学長 田村 俊輔